
導かれるもの

翠

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
導かれるもの

【Nコード】
N3736M

【作者名】
翠

【あらすじ】
銀河の妖精シェリル・ノームは、運命の系に導かれるようにマクロスフロンティアに来艦する。
TV版第1話のシェリル補完

「ねえ、グレイス。フロンティアってどんなところなの？」

頬にかかる柔らかなストロベリーブロンドを耳にかけると、シェリルはツアースケジュールを視線で追いながら、傍らに座るマネージャー、グレイス・オコナーに問いかけた。

「あら。どんなところか興味があるの？」

グレイスは驚きでずれたメガネの細いフレームを指で軽く整え、自らがプロデュースする超一級のアーティスト、銀河の妖精と呼ばれるシェリル・ノームに視線を向けた。

シェリルは好き嫌いなどの自己主張がはつきりしており、いわゆる「ワガママ」とカテゴライズされがちであるが、仕事に対してとても真面目である。とりわけグレイスが持つてくる仕事であれば異論を唱えることもなく、黙々とスケジュールをこなすのを常としていた。今回のギャラクシーツアーのような過密スケジュールであっても、シェリルはただの一度も不満を漏らしたことはない。

いかにオーディエンスを惹きつけるステージにするか。最高のステージをオーディエンスに。 最

彼女の興味の中心はもっぱらそういった仕事に関する事で、歌や衣装、舞台装置に関すること以外の質問をグレイスが耳にしたのはこのツアー中初めてのことだった。もっとも、忙しすぎて興味を示す暇がなかったとも言えるかもしれないが。

そんな彼女が初めて興味を示したもの。

“第25次新マクロス級移民船団マクロス・フロンティア”

「だって、フロンティアは初めてゆっくりみることのできるバイオプラント船なのよ。ツアーの最終目的地だし、少しはお休みもくれるんでしょう？　だったら、色々みてまわりたいじゃない」

宇宙を映したような蒼い瞳をキラキラと輝かせ、頬を桜色に染めて夢見心地に語るシェリルをみてグレイスは、「運命かしら」とちらつと考えた。そしてそういった考えがよぎるとは、自分もまだまだ人間の思考に囚われすぎているのか、そういう思考にこだわった故のプログラミングされてたどり着いた結果なのかと考えを巡らせたが、詮無いことと思考を遮断する。

「そうねえ、最後ですものね……。ゆっくり羽を伸ばさないかね」

グレイスは魅力的に微笑むと、胸元のペンダント型の出力装置を空に向けていくつものモニタを表示させ、フロンティアの説明を始めた。

触れたらサクツと音を立てて崩れそうなほど薄く何層にも積み上げられたパイ生地の間には、生クリームやカスタードクリームが品

良くおさまり、真つ赤な宝石のような輝きをみせるイチゴがこれでもかと存在感を見せ付けるように飾られている。

アイランド3特産カバ牛のミルクと、アイランド1特産イチゴ“とよのか”を惜しげもなく使った、ギャラクシーネットワークの口コミランキングでいつも上位に君臨するストロベリーパイを目の前にして、シェリルはごくりと喉を鳴らした。

あらやだ。ハシタナイ。

とは思つものの、マクロス・ギャラクシーで、特集が組まれるたびに、一度は行ってみたいと思っていたマクロス・フロンティア。その憧れの地の、そのまた憧れのケーキが目の前にあるのだ。喉が鳴らないほうがおかしい。

これよこれ、夢にまでみたストロベリーパイ！
やっと食べられるのね……。

「いっただきまーす」

面白いほど綺麗にフォークが通るストロベリーパイを一切れ切り分けると、シェリルは幸せそうに口に運んだ。

「起きてください？ シェリル」

優しい庇護者の声と共に一瞬にして掻き消えるストロベリーパイ。

「ん……なあに？」

失望感と安堵感。身体が自由に動かせない倦怠感がシェリルの全身を襲う。

まだ寝ぼけているシェリルを、しょうのない子と慈愛の織り交ざったため息をついてグレイスが更に声をかける。

「そろそろ到着ですよ」

ぱちりとシェリルの目が開いた。

夢とはいえストロベリーパイを食べ損ねたのは残念だけど、こちらには現実。これからいくらでも食べるチャンスはあるのだ。この窓の外には、循環施設をいくつも従えたマクロス・フロンティアがあるはず。

ああもつ、アイマスクを取るのももどかしい。

シェリルが取り外して放り出したアイマスクをタイミングよくグレイスがキャッチ。そしてこれまたシェリルの意を汲んでいるグレイスがかさずーテンを開けてくれる。

さすがグレイス。愛しているわ。

シェリルは窓から差し込む光のあまりの眩さに一瞬顔を背けたが、その光の向こうに広がるマクロス・フロンティアの美しさに息を呑んだ。

「うわぁぁぁ」

なんて、綺麗……。

シェリルは窓に張り付き、マクロス・フロンティアを見下ろした。視線の先にあるドーム型宇宙船の中には、海や森、街が広がっている。

宇宙^{そふ}から海を眺めることが出来るなんて、素敵。素敵。素敵。なんてステキなの。デカルチャーだわ。

ひとつの変化も見逃すまいとフロンティアを見つめるシェリルの蒼い瞳に白い影が飛び込んできた。

鳥？

必死に目を凝らすシェリルだが、優雅に飛んでいたと思われたそれは瞬く間にスピードを上げて消えてしまった。

……なんだったのかしら。まあいいわ。見つけてみせるわ。探し出してみせる。

だって私は、シェリル・ノームなんですもの。

うつとりとフロンティアの海を見つめながら、シエリルはこれから自分を待ち受けているであろう世界に、運命に、期待で胸を膨らませていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3736m/>

導かれるもの

2010年10月10日14時06分発行